

# 民俗博物館だより

Vol.31 No. 2

2005 2. 1



鍛冶屋の工場 (吉野町下矢治 阪本鉄工所)

## 目 次

### 【新作映像資料の紹介】

吉野における木地製作

—紀州黒江系ろくろ轆轤師の伝承技術— . . . . . 1

### 【特別講演会の記録】

民俗博物館収集民具から奈良の古代を探る . . . . . 5

ならみんぱく春夏秋冬 . . . . . 7



### 梅だより

大和民俗公園内  
「みんぱく梅林」  
と民家集落、あわ  
せて150本の梅は  
2月下旬～3月中旬  
が見頃です。

\*\*\*\*\* 次回企画展 \*\*\*\*\*

特別陳列 四季おりおりの民具Ⅵ「伝承の三月節供一雛まつり」

平成17.2月26日(土)～4月3日(日)

【新作映像資料の紹介】

## 吉野における木地製作—紀州黒江系轆轤師の伝承技術—

森本 仙介

木地屋とは轆轤師とも呼ばれるように、ロクロを回転させて木を削り、椀や盆などの円形の木地を挽く職人のことです。木地とは漆塗り（漆器）の土台となる木で作られた容器の素地のことで、これに漆を塗ることで製品の耐久性を高めることができます。そのため、漆器産業の盛んな地域の近くには必ず木地屋の存在があります。吉野町宮滝の故辻本順三氏（1909～1999）は県内において最後まで木地を挽いていた職人であり、その技術は日本の三大漆器生産地である紀州黒江（現在の和歌山県海南市黒江）における木地物製作技術の伝統を継承していました。

1988年（昭和63）、辻本氏のご協力により、当館学芸員（当時）浦西勉の立ち会いのもと、㈱クリエイティブ・カンパニーが椀と盆の木地製作の撮影を収録しました。本稿ではこの映像を編集するにあたり、その椀木地作りの概要を紹介したいと思います。

なお、当館では、平成14年度より吉野地方における生産活動の諸相を示す民具の調査・収集・整理を進めています。これは県指定文化財「吉野の山村生産用具」1,226点（昭和58年度指定）をベースに内容を拡充し、「吉野林業」を中心とした有機的な資料群として収集民具を体系化することを目指しています。今回の映像編集は、この「コレクション化事業」と無関係ではなく、当館へ寄贈していただいた辻本氏使用の道具も木地製作用具として順次整理を進めているところです。

## ■概要

明治以降、野迫川村をはじめとして吉野地方中西部で活躍した木地屋の多くは、和歌山県の美里町や桃山町周辺から移動してきた職人であったことが知られています。高野山麓に位置する美里町一帯は近代以降、紀州黒江への木地の一大供給地として急速に発展した地域ですが、「吉野林業」が生み出す豊富なヒノキの間伐材を求めてここから木地屋が吉野に移動したものと考えられます。

明治の終りから大正期以降になると、吉野地方に出稼ぎに来ていた紀州の木地屋のなかには、大塔村のこだい小代や黒滝村のあわいだに粟飯谷、吉野町の山口、宮滝など、移動先の村に定住して木地を挽き、製品を黒江へ出荷する職人がでてきました。あるいは、村でも若者たちが木地屋に弟子入りすることもありました。吉野町宮滝の辻本順三氏も、高等小学校を卒業したばかりの昭和初期、宮滝に小屋がけしていた紀州の木地屋から技術を学び、数年間、師匠について各地を転々としたといえます。

## ■椀木地製作の工程

木地物作りには、[1]サキヤマ、[2]コギリ、[3]アラキドリ、[4]マルメ、[5]カンナマエといった工程があります。[1]はサキヤマ師（先山師）、[2][3][4]はマルメ師（丸め師）、[5]はカンナマエ（鉋前）といった専門の職人がいたように、木地製作には、かつては数人のグループによる分業体制がとられていました。グループの長をオヤカタ（親方）といい、山主と交渉して立木を買ったり、弟子や職人を監督しました。

サキヤマ師とは立木を伐採する職人で、山師ともいい、特に木地屋に特有の仕事ではありません。木地屋のグループ全員で原木を伐採したり、山仕

事一般のサキヤマに頼むこともありましたが。マルメ師は主に弟子の仕事ですが、手が足りない時には家族のものがすることもありました。カンナマエとはロクロを回転させてカンナ（木地用の刃物）で木地を挽く作業をいい、一般的に木地屋といえればカンナマエのことを指します。おもにオヤカタが担当したように最も難しく、習得するのに時間がかかりました。

## [1] サキヤマ（先山）

紀州黒江における民衆向け漆器の大量生産は、シンモチ（芯持）のヒノキの細い幹でも椀を作ることのできる、縦挽きの木地を多用したことにその特色があるとされています。かつては木地の材料としては紀伊半島の深山に生えるハズサ（和名ミズメ）やトチのような広葉樹が多かったようですが、材が少なく高価になるので、大量生産品には安いヒノキの間伐材をおもに用いるようになりました。乾燥したときに狂いや割れがないようにハズサなどはシンを抜いて堅木に、またトチは横木にロクロで挽きますが、ヒノキはシンを抜かず堅木に挽いたので、仏器などの小さい製品には15～20年生の細い木でも利用しました。10年生から40年生の間伐材が主に使われ、50年生ぐらいが最大であったといえます。若い間伐材で、曲がったり、末と先で太さが違うような形の悪い木は木地屋にとっては安く手に入る良材だったので。

原木は伐採された後、その場で2間ほどの長さにノコギリで挽き、山小屋に運び込まれます。

## [2] コギリ（小切り）

材をサシで椀の高さに測り、竹弓のバネのついた特殊なノコギリで小切る（玉切りする）作業で

す。大きなフシはカンナでは削れず、製品にならないので捨てますが、小さなフシの場合には椀の底の高台であるイトジリ（糸尻）になるようにしました。



ノコギリ

地面に深さ1mほどの穴を掘り、ノコギリを穴の斜め下に向かって設置します。ノコギリの歯は引く、押す両方で切れるように刃が二等辺三角形になっています。本来は2人が向かい合って両端から力を入れる台切鋸ですが、ノコギリの端を6枚の竹弓で挟み、皮面を向こう

側にして取り付けることで、手前に引き上げる時には力を要しますが、穴の下方に押す時にはバネの力によって自動的に戻るように工夫されています。挽く時には原木を両足で押え、動かないように固定します。

### [3] アラキドリ (荒木取り)

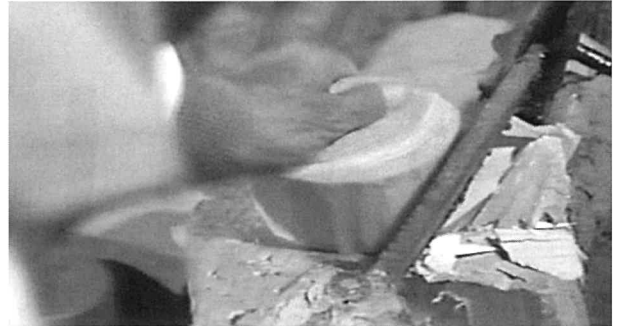
高さ40~50cm、直径20cm程度の丸太を柱に綱で固定し、この台の上で堅木に取った材を椀の型に円く縁取りする作業です。材料の上に円いカタ（型）をのせ、チョンナ（手斧）の頭でカタを叩いて材に固定します。カタには材を固定するツメが付いていますが、このツメはクギの頭をつぶしたものを打ち込んで作ったものです。材を左手で左（反時計回り）に回転させながら、カタからはみ出した部分をチョンナであらくへつり（はつり）ます。



アラキドリ

### [4] マルメ (丸め)

材をセンダイ（銚台）にのせ、ロクロで挽きやすいように、センで椀の形に下方を少しすぼめるように削る作業です。センは一種のオシギリ（押切）で、材を左手で左に回転させながら、台に斜めに固定されているセンの刃で縁を押し削ります。こうしてできたアラガタをマルメといいます。



マルメ センをかける



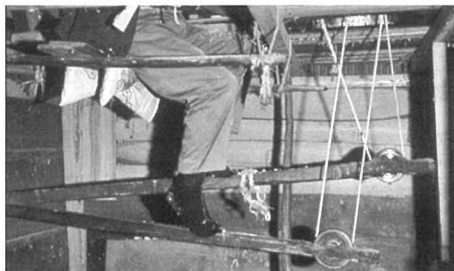
マルメ木地

### [5] カンナマエ (鉋前)

ロクロの回転を利用して、カンナと呼ばれる専用の刃物で木を削る作業です。かつては弟子などの助手が綱を両手で引いてロクロの軸を回転させ



カンナマエの作業の様子



足踏式ロクロ

ていましたが、明治期になって足踏み式が発明され、ミシンのように足を使ってロクロの軸を回転させることで1人でも木地を挽くことが可能になりました。しかし、機械動力と違い軸が左右交互に回転するのは手引きと同じです。

カンナマエの工程は以下の①～⑤にわかれますが、アラケズリにはカンナ、シアゲにはマエビキ、穴を開けて拡げるにはアナグリといった、刃先の形の異なったカンナが必要です。



カンナは木地屋自身がハガネを購入して自作します。修行の最後に刃物の作成や手入れの方法を学ばなければ一人前の木地屋にはなれませんし、独立できません。木地屋は鍛冶屋かじでもあったのです。カンナの製作は、先ず火をつけた松炭にフイゴで風を送ってハガネの棒を熱します。これをカトコかの上に置いて金槌で打ち、ヤスリで荒く研いで形を作り、水で焼き入れをします。最後に砥石いしで刃をつけます。作業中でも切れが悪くなると砥石で研ぎ、いつもよく切れるように保っておかねばなりませんでした。



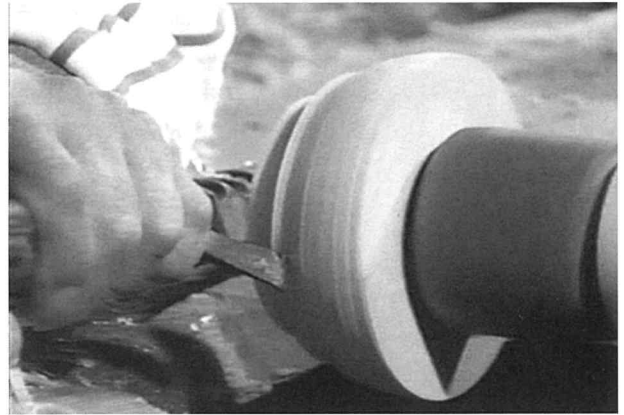
カンナの製作 ハガネを熱する



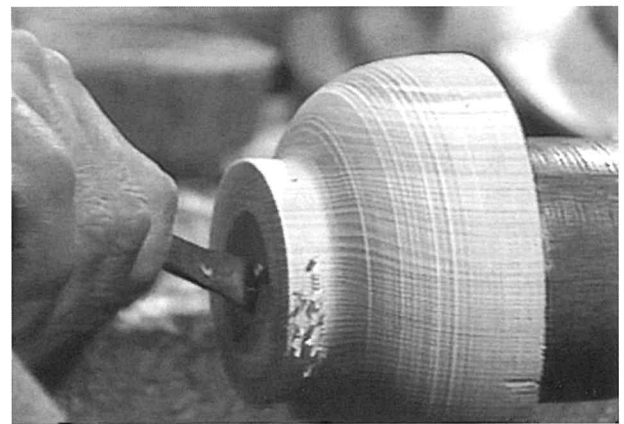
カンナの製作 ハガネを打つ

① <外側のアラケズリ> 軸孔じくあなにツメ (着口) をはめこみ、腕の上部になる面を金槌で打ち付けて固定します。右手に持ったアラケズリ用のカンナ

を左手でウマという台に押さえつけて固定し、回転する材にあてて荒削りします。最後に腕こうだいの高台であるイトジリ (コジリ) のおよその形をつくり、イトジリの底の窪みくぼをあらく掘ります。

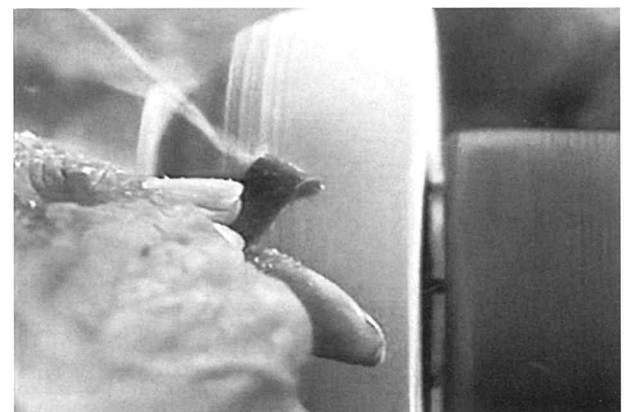


外側のアラケズリ



イトジリの粗成形

② <外側のシアゲ> 腕の外側になる面を平らに削って仕上げます。シアゲにはマエビキというカンナを使います。マエビキには刃が真っ直ぐのカクバ (角刃) と、湾曲したマルバ (丸刃) があり、腕の外を仕上げるにはカクバを使います。また、イトジリの裏を仕上げるウラバ (裏刃)、カクバとマルバの中間のアエバ (間刃) があり、盆などの平らな底の容器を仕上げるのに使いました。ウマは使わず、右手に持ったマエビキの刃の先端ふくの膨



外側のシアゲ

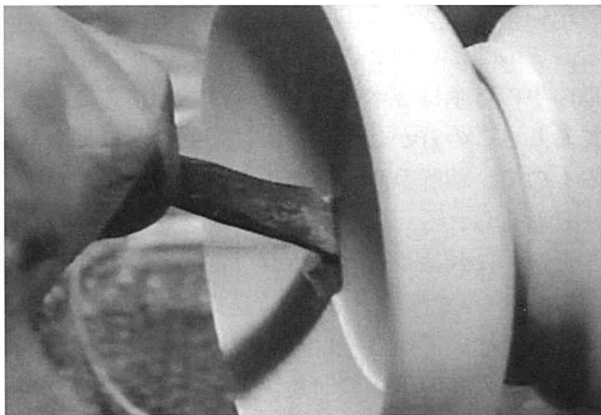
らみあたりを左手の親指で押し、刃の材にあたる強さを調整します。

③〈内側のツッコミとヒロゲ〉軸孔からツメを外し、かわりに木製のハメカタ（嵌め型）を取付け、ここに外側を仕上げた木地を叩いて固定します。先の尖ったツッコミ用のアナグリというカンナで真ん中から穴を開け、一定の大きさに拡げていきます。先の尖っていないヒロゲ用のアナグリで穴を拡げることもあります。



内側のヒロゲ

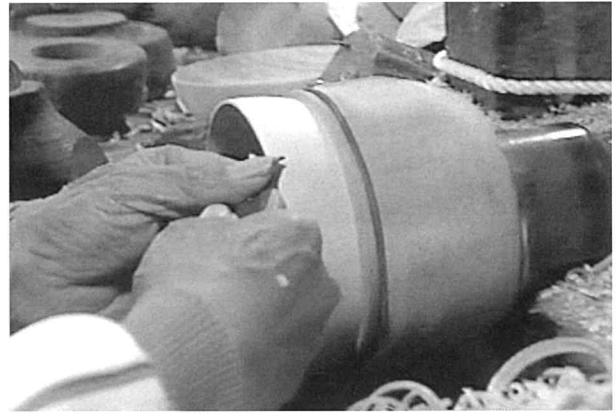
④〈内側のアラケズリ〉穴をある程度拡げると、アラケズリ用のカンナに持ち替えて内側のおよその形を削ります。



内側のアラケズリ

⑤〈内側のシアゲ〉碗の内側になる面を平らに削って仕上げます。荒削りされた碗の内側をマルバ（丸刃）のマエビキで削ります。最後に縁を仕上げると完了です。

材は生木だとそのままでも挽けますが、乾いてしまうとうまく削れないので、マルメを水に浸けておき軟らかくしておきます。乾燥の程度により1～3日も浸けて道具切れをよくしました。大量の水分を材に含ませるので、カンナをあてて削ると水



縁のシアゲ



完成

が飛び出すほどであったといえます。削り終えた製品は、最後に伏せた形で積み重ねて乾燥します。火気や日光、風などが当たると急激に乾燥してしまい、狂いや割れの原因となるので、日陰でゆっくり4日間ほどかけて乾燥させました。

註(1) 紀州黒江系轆轤師(木地屋)については、杉本寿『木地師制度の研究』1(清文堂出版 1974年)、冷水清一『海南漆器史』(1975年)、特別展図録『吉野の山村と伝承文化』(奈良県立民俗博物館、1991年)、森本仙介「吉野における木地屋の終焉をめぐって」『奈良県立民俗博物館だより』92・93合併号(奈良県立民俗博物館 2004年)を参照。

(2) 作業工程については、吉野町山口の松本寅太郎氏(1916～)、辻本氏の師匠である榎本幸四郎氏の孫にあたる和歌山県美里町田の榎本孝幸氏(1940～)からの聞き書をもとに、浦西勉「奈良県の漁業・諸職」『近畿の生業2 漁業・諸職』(明支書房 1981年)、同「木地師の碗づくりの用具—民俗資料調査抄報⑤—」『奈良県立民俗博物館だより』30(奈良県立民俗博物館 1982年)、『伝統産業技術保存記録 木工轆轤』(奈良県商工観光館 1988年)、『和歌山県の諸職—諸職関係民俗文化財調査報告書—』(和歌山県教育委員会、1991年)、特別展図録『紀州・移動する職人たち—鍛冶・木地・炭焼き—』(和歌山県立紀伊風土記の丘 2003年)、特別展図録『民具が語る暮らしの変遷—資料収集30年の軌跡—』(奈良県立民俗博物館 2004年)を参照。

【特別講演会の記録】

## 民俗博物館収集民具から奈良の古代を探る

河野通明 (神奈川大学教授)

当館では、2004年9月18日(土)から11月23日(火)にかけて、特別展「民具が語る暮らしの変遷—資料収集30年の軌跡—」を開催した。これは、開館30周年を迎えたことを記念して、当館の代表的な収蔵品である「吉野の山村生産用具」と「奈良盆地の農業生産・生活用具」の一部を展示したものである。

その期間中の10月17日には、「民俗博物館収集民具から奈良の古代を探る」という題目で、河野通明氏の特別講演会を開催した。講演会は、民具の具体的な分析に基づいて古代のことを明らかにしようとする内容であったので、考古学の愛好者や民具の研究者など普段とは異なる幅広い参加者があり、盛況の内に幕を閉じた。

河野氏は、近代の民具から古代のことを探ろうとする研究分野において、中心的な役割を担っている研究者である。河野氏の研究は、当館で収蔵されていた民具を調査することからスタートした。今回は、その時の調査成果や全国の博物館に収蔵されている民具の分析結果などを踏まえながら、古代における畜力農耕(牛馬などの家畜の力を利用した農業)や殖産興業政策(生産を増やし産業を盛んにするための政策)のあり方を具体化させる興味深いものであった。

〈岩宮隆司〉

### 【講演会要旨】

#### 1. 5世紀に馬鍬が伝来

田植えに先立って泥を細かくし田をならす馬鍬は、全国的にマグワ、マンガなどウマグワ(馬鍬)系の言葉で呼ばれている。これは馬鍬が日本で最初に使われた頃に、馬に引かせていた証拠である。馬鍬はアジアでは牛や水牛に引かせてひろく使われているが、馬に引かせるのは日本だけである。そこから馬鍬が伝わった頃には日本にはまだ牛はおらず、大型家畜は馬しかいなかったもので、やむをえず馬に引かせたと考えれば辻褄が合う。そして馬は使われていたが牛はまだとなれば、考古学の成果から5世紀となる。つまり馬鍬は5世紀に伝来したことになる。

馬鍬が朝鮮系渡来人の持ち込みなら、牛とともに入ってくるはずなのでウマグワとはならない。他方、中国長江(揚子江)流域の江南地方では、4世紀に北方から移動してきた漢族によって畑作



当館所蔵の長床犁資料群

具の水田農具化の技術革新が進行中で、このなかで馬鍬は開発された。日本の馬鍬はここから伝来したのでであろう。5世紀の江南地方との交流となれば、倭の五王の遣使の時期にあたる。倭王の使節は効率よく代掻きする馬鍬に感動して物々交換で入手し、持ち帰ったのでであろう。



河野通明氏による講演会の様子

#### 2. 6世紀に朝鮮系渡来人が犁を持ち込む

犁は牛に引かせて田畑の土を起こす道具である。この犁はいつどこから伝わったのか。紀伊半島の牛の首木は2本の棒で頸をはさむ構造となっており、この首かせ付き首木は朝鮮半島に見られるもので、朝鮮系渡来人が牛と犁を持ち込んだ痕跡と考えられる。この首木はウナグラと呼ばれてきたが、これはウナ(ウナジ・首筋)に置くクラ(鞍)という意味で、「背中に置くはずのクラを何と首筋に置いているではないか」という初めて牛耕を見た人々の驚きの印象が刻印されている。つまり当時の日本人は農具を鞍で引かせていたのであり、鞍で引かせるのは馬であることから、すでに馬鍬が使われていた場に牛と犁が持ち込まれたことになる。となるとその時期は6世紀以降ということになる。またウナジグラではなくウナグラと呼んでいることからすれば、人々が首筋のことをウナジではなくウナと呼んでいた時代に伝わったと考えられ、それは6世紀以前と推定されることから下限は6世紀となる。これを先の6世紀以降という推定と重ねると、朝鮮系渡来人による牛と犁の持ち込みは6世紀に絞られる。

### 3. 7世紀に政府が中国系長床犁を導入

犁にはスキーのような床木の付いた長床犁<sup>ちようしやうすき</sup>と床のない無床犁<sup>むしやうすき</sup>があり、長床犁は中国系、無床犁は朝鮮系である。したがって6世紀に渡来人が持ち込んだのは無床犁であったことになるが、奈良県の犁は長床犁である。この中国系長床犁はいつ、だれが持ち込んだのか。

山口県ではくの字に曲がった首木の稜線に引綱を沿わせる引綱渡し首木が使われてきた。この特異な首木は中国の絵や民具に見られることから、中国系である。中国系首木には中国系長床犁が伴っていたはずであるが、山口県の在来犁を見ると朝鮮系無床犁と中国系長床犁の混血型である。ということは6世紀の朝鮮系無床犁の上に中国系長床犁の波をかぶったことになり、長床犁の伝来は7世紀ということになる。

また九州では鞍であるのに背中をまたぐ杵が1つだけという日本独特の鞍で犁を引かせてきた。この鞍を単橋鞍と呼ぶことにしたが、熊本県では杵木の下端に穴をあけて引綱を通し、杵木に沿わせて頂部の千木部に巻き付けて長さを調節するというタイプが見られる。この引綱を杵木に沿わせる姿は山口県の引綱渡し首木と原理的に同じである。そこから単橋鞍は引綱渡し首木を鞍と勘違いして背中に置いてしまったということに始まると考えられる。

ではこうした勘違いはどんな場面で起こるのかといえば、これは首木が十分な説明もなしに上から下ろされてきたというケースであろう。この中国系首木には中国系長床犁が伴っていたはずである。つまり長床犁は政府によって普及がはかられていたのであり、その政策は九州にもおよぶ大規模なものであったと考えられる。

### 4. 長床犁導入政策の上限と下限

では大化政府はどんな方法で長床犁を全国に普及させたのか。古代は設計図で技術が伝えられる段階ではないので、実物模型を大量に作って各地の首長の手元に送ったものと推定される。この模型は様<sup>ためし</sup>と呼ばれ、古代では中国でも日本でも、技術移転にはいつもこの方式が使われてきた。犁や引綱渡し首木の様が600ほど作られて各地の評督<sup>こおりのかみ</sup>(のちの郡司)のもとに届けられ、その様のコピーが実用に供されたと考えられる。

滋賀県湖東の南部には直轄で無床という純粹の朝鮮系犁が使われてきた。混血していないのは長

遺跡名	所在地	遺物の状況	時期	一木へら	反転方向	犁床長
梶原 A	兵庫	木部完形品	7C中～後葉	○	左	66.5
梶原 B	兵庫	木部ほぼ完形	7C中～後葉	○	左	70.0
下川津 A	香川	犁床・犁へら	7C初～後葉	○	左	78.0
下川津 B	香川	木製犁へら	6C後～8C初	○	左	—
川除藤ノ木	兵庫	木製犁へら	7C	○	右	—
屋代	長野	小型の形代	7C後半	○	左	8.4
安坂・城の堀	兵庫	犁床	7C中～後	△	左	73.0
西河原森ノ内	滋賀	犁床	7C後葉	×	左	64.4

〔表〕7世紀の出土犁一覧 網掛けは一木犁へら型

床犁導入政策が出された以降に渡来した場合となり、それは百済・高句麗滅亡にともなう難民の流入となる。ところで『日本書紀』には665年に百済の男女400余人を近江国神前郡、669年には700余人を蒲生郡に住ませたという記事があり、これが朝鮮系無床犁の分布域と重なる。そこから政策の施行時期は665年2月以前で、大化以降に派遣された遣唐使がはじめて帰国した654年7月以降の10年7ヶ月に絞り込むことができる。

### 5. 政府モデル長床犁が出土

ところで〔表〕のように7世紀以降、各地で犁が出土するが、一木造りの曲面犁へらという独特の長床犁が大部分を占め、犁床長は72cm前後で左反転が主流をしめる。この共通点をもつ犁が香川県・兵庫県・長野県から出土するとなると、全国規格が存在した可能性が高い。これは政府がモデル犁の様を全国に流したとする民具からの推定と見事に重なる。7世紀出土犁は、政府モデル犁のコピーだったのであろう。

### 6. 奈良の民具は古代を語る

これまで民具は、一昔前の暮らしを語る資料として考えられてきた。ところがいま見てきたように、全国的な比較調査を重ねるなら、大正・昭和の民具からも各地の5～7世紀の様子が確実に復元できるのである。これまで古代の研究は主として文献史料によってきたが、『古事記』『日本書紀』には都近辺の、天皇・貴族にかかわる、政治・外交それも事件性のあるものしか記録されないという限界がある。それに対して民具は全国どこにでもあり、そこからは庶民の日常生活や経済活動、それに長床犁導入政策のような大規模な政策の痕跡まで抽出することができる。

いま各地で地域のアイデンティティーは何かを模索されているが、民具はそれに応え、地域起こしの核となりうる資料といえよう。民具は「県民遺産」として、地域住民の手で守っていこうではないか。

# ならみんぱく春夏秋冬

—最近の活動から—

## 【最近の活動から】

### ◆展覧会◆

#### 特別陳列「四季おりおりの民具」

V. 春を待つ 一昔の冬のくらし

平成16年12月11日(土)～平成17年2月13日(日)



▲回転ごたつ

県内各地の方々からご贈りいただいた館藏品の中から、冬の季節にちなんだ品々を展示紹介するものです。

電気やガスが未だ普及せず、また住居も現在のように気密性の高いものではなかった時代、人々は厳しい冬の寒さをどのようにしのいでいたのでしょうか。

衣服の工夫(防寒着)、身体を温めるための用具(暖房用具)を紹介するほか、冬の農閑期に行われた仕事、夜長を過ごすために使用された灯火用具など明治～昭和30年代頃まで用いられた生活用具、あわせて約200点を展示いたしました。

#### 主な展示品

トンビ、ポッコ(綿入れの仕事着)、ドマキ(綿入れの腰巻き)、オイネ、絞羽織りの頭巾、ユキグツ、ユキワラジ、シビグツ、手あぶり、足あぶり、陶磁製湯たんぽ、こたつ(槽ごたつ、回転ごたつ等)、火鉢、ハト(酒罌用具)、炭かご、炭団、マメタン、夜着、あんどん、石油ランプ、コトボシ、手燭、マツトウダイ、俵編み、むしろ機、横槌、オモケ(芋桶)、木綿機、針箱、ほか

### 特別企画(撮影会)

55年前のウエディングドレス  
現代に蘇る～花嫁さんと亥の子  
ハレの祝い～

大和民俗公園旧岩本家で一昔前の花嫁衣装の再現や庭での餅つきなど。農村のハレの日を演出いたしました。参加者約200名。



嫁入り姿 今中由美子さん(大和郡山市)

### コーナー展

- ・林宏先生のフィールドノート(特別公開)  
平成16年9月18日(土)～11月23日(火)
- ・山村の食 平成16年9月18日(土)～12月23日(木)
- ・お正月 平成16年12月25日(土)～平成17年1月30日(日)

### ◆講座・ワークショップなど◆

#### 特別講演会「民俗博物館収集民具から奈良の古代を探る」

日時：平成16年10月17日(日) 午後1時半～3時

講師：神奈川大学教授 河野通明氏

参加者：42名

(内容については、5～6頁を参照)

#### ワークショップ「杓子づくり」

日時：平成16年11月3日(水) 午後1時半～4時

講師：和泉恵夫氏

体験参加者：41名

特別展「民具が語る暮らしの変遷」の展示内容について理解を深めていただけるよう展示室入口ロビーに実演コーナーを設け、吉野郡大塔村ご出身の和泉恵夫氏が平杓子製作工程の実演解説を行い、あわせて参加者に杓子の仕上げ工程を体験していただきました。



ワークショップ  
杓子づくり

#### 体験学習「しめなわづくり」

日時：平成16年12月12日(日) 午後1時～3時半

講師：吉岡秀信氏

参加者：30組

当館開館以来、恒例の催しです。しめなわを作る体験を通して、昔ながらの正月迎えの風習やその意味について考えました。



体験学習  
しめなわづくり

#### 【表紙の写真】

阪本正治氏(1931～)は三代続く鍛冶屋。初代は檜尾(吉野町)の峠氏に師事したという。写真は、銅製のカナトコの上で鎌を打つ作業である。左にベルトハンマーが見える。普段は、奥さんが向う鎌を担当する。近年は、林業の不振により仕事も減った。3月には仕事場を取り壊し、鍛冶屋を廃業の予定。これで吉野郡の鍛冶屋は十津川村と下市町、大淀町に3軒残るだけとなる。

## 奈良県立民俗博物館

〒639-1058 大和郡山市矢田町545(大和民俗公園内)  
TEL.0743-53-3171/FAX.0743-53-3173

開館時間：午前9時から午後5時まで(入館は4時30分まで)

※公園内民家集落の見学は午後4時まで

休館日：毎週月曜日(当日休日にあたる場合翌日に振替)  
年末年始

観覧料：大人200円 大・高生150円 中・小生70円

※20名以上団体割引あり

※65才以上、身障者とその付添1名は無料

※毎週土曜日は小・中・高生は無料

※公園、民家園は無料

交通案内：近鉄郡山駅→奈良交通バスターミナル①のりば→  
(約15分)→「矢田東山」下車、北へ徒歩7分  
駐車場あり(乗用車118台、バス18台身障者優先3台)

ホームページ <http://www.pref.nara.jp/bunkak/minpaku/>

